

2022（令和4）年度

大阪大学医学部医学科

学士編入学試験問題

【小 論 文】

問題冊子

（注 意）

- 1 問題冊子及び解答冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
- 2 受験番号は、解答冊子の表紙及び各解答用紙の受験番号欄に、正確に記入すること。
- 3 問題冊子は、表紙を含み4枚ある。ただし、2枚目、4枚目は白紙である。
- 4 問題冊子又は解答冊子の落丁、印刷の不鮮明等がある場合は、解答前に申し出ること。
- 5 解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。枠からはみ出してはいけない。
問題冊子に解答を書いても採点されません。
- 6 問題冊子の白紙は、適宜下書きに使用してよい。
- 7 問題冊子は、持ち帰ること。

以下の文章を読み、問いに答えなさい。

STAP 細胞の発表¹⁾から二年以上経った今、あらためて振り返ると、STAP 細胞事件とは一時的だったのかという疑問が湧いてくる。2014 年 1 月 28 日の「サイエンス」を掲載したような科学的発見、iPS 細胞を超える細胞の新発見という大発見し、そして、「国際誌には、おつて、盗用が疑われ、世界中から研究費が注ぎ」という騒動が起きた。国際誌「SCIENCE」をめぐって論議が展開され、メディアが大騒ぎするなかで、2014 年 12 月には、iPS 細胞は存在せず、iPS 細胞の導入であることが明らかになった。2015 年 3 月、世界の三つの国の研究機関が、iPS 細胞の導入で研究ができていたと発表した。STAP 細胞は、一年以上にわたり世間を騒がせ、日本の科学の信頼を失墜させた末に、完全に消えていった。（中略）

わが国は、いつの間にか、研究不正大国になってしまった。これまで、科学者は研究不正を避けるように、厳格な倫理ガイドラインを厳密に遵守することで防がったことが、2000 年代末以降に不足が露れてきた原因の一つである。そして、わが国の研究不正は、2014 年にピークを達した。

しかし、2014 年の不正な事件は数個ではなかった。ノバルティス社は、薬物を開発し、試験に供する動物と、動物実験としての倫理規定を重た。その結果は、所産品全量から国内の製薬業界に広がっている。STAP 細胞事件の後は、それでも、わが国の研究界の中心に、置かれてしまっている。しかし、わが国は、2014 年の不正な研究を契機とし、不正の多い研究界を再構築し、立ち上がるようになっている。

その意味で、STAP 細胞事件の主演 HO（イニシャル）は反面教師として偉大な存在であった。

「研究不正 科学者の捏造、改竄、盗用」黒木登志夫著（中公新書）2016 年 より一部改変

¹⁾ 2014 年当時、理化学研究所に在籍した HO（イニシャル）が、通常の細胞にストレスを加えるだけで、その細胞が多分化能を有する（stimulus triggered acquisition of pluripotency = STAP）細胞になると報告し、iPS 細胞を超える新発見と騒がれたが、その後の調査で研究不正であることが判明した事件。

²⁾ ノバルティス社が降圧剤（ディオバン）の臨床研究において多くの大学医学部を巻き込んだ研究不正を行い、多額の研究寄附金が動いた事件。

（問い）

科学の世界でなぜ研究不正が起こるのか、また、どうすれば研究不正を無くす（減らす）ことができるのか、自分の考え方を述べなさい。（句読点を含めて 1000 字以内）